

風姿花伝第一、年來稽古条々

三十四五

この比の能、盛りの極めなり。こゝにて、この条々を究め悟りて、堪能になれば、定て天下に許され、名望を得つべし。若、この時分に、天下の許され事も出来ず、世間的名望も思ふほどでなければ、たどひ如何なる上手でも、まだ眞の花を究めて居ない爲手だと悟るべきである。若し眞の花を究めて居ない者だつたら、四十以後からは能は下るに相違ない。即ちこれ、後になつてあらはれる証拠（花を

〔口訳〕

此の時代の能は、一生涯の中で盛りの絶頂である。この際に、この花伝書

に説く所の条々を究め悟つて、堪能の域に達すれば、定めて天下に名人として許され、名望を博す事が出来るであらう。若し此の時分に、天下の名人と許される事も出来ず、世間的名望も思ふほどでなければ、たどひ如何なる上手でも、まだ眞の花を究めて居ない爲手だと悟るべきである。若し眞の花を究めて居ない者だつたら、四十以後からは能は下るに相違ない。即ちこれ、後になつてあらはれる証拠（花を

如何なる上手なりとも、未
まこと
真の花を究めぬ為手と知る
べし。若し究めずば、四十
より能は下がるべし。それ
後の証拠なるべし。さる程
に、上^あがるは三十四五まで
の頃、下^さがるは四十以来な
り。返々^{かへすぐ}、この頃天下の許
されを得ずば、能を極めた
りとは思ふべからず。此所
にて尚慎^{なをつ}むべし。此の比^こは
過し方を覚え、又行先^{ゆくさき}の手
立てをも覚^{おぼ}時分なり。この
頃究めずば、この後^{のち}天下の

究めてゐない証拠^{のち}）であるといふべき
だ。かやうな訳で、能の上達するのは、
三十四五までの時代、下るのは四十以
後である。くどく言ふやうだが、此の
三十四五で天下の人々から名人として
許されなかつたならば、能を究めたな
どと思つてはならない。ここで尚十分
に自己をつてしまねばならぬ。即ち此
の時代は、今まで習得した芸能を完全
に我がものとし、又今後の手立をもさ
とる時分である。この時分に花を究め
なければ、これ以後に天下の許されを
得ることは、それは到底不可能であら

う。

許されを得んとの事、返々
堅かるべし。

三体物真似の始の二十四五歳から約十年の鍛錬工夫を経て、能に於ける極盛の時代が来る。この時代の仕事は、「真の花を究める」といふ一点にある。それは芸の鍛錬と、花を咲かすべき工夫をきはめるにある。花伝書に記す所の条々を究め悟るは、工夫を究めてこれを自悟するのである。堪能は芸の鍛錬修行の結果の方である。この両者は、「能と工夫の究まりたる為手」たるためで、その結果は真の花を獲得するのである。かくして天下に許され名望を得るのである。

真に花を究めてゐるや否やは、何によつて判ずるかといへば、世人に許され名望が高くなるか否かで判ずるといふ。ここに芸道の面白さがある。一寸考へると、世人の批評や名望などといふものは、そんな判定の標準にはならないもののやうにも考へられるが、實際は、世阿弥のこの言葉は千載の真理だと思ふ。歌舞音曲や芝居などは、瞬時に消えてゆく芸である。知己を百年の後に俟つといつたやうな文芸や造形芸

術とはその点で非常なちがひである。文芸や絵画でも、当時に認められないで後世に認められるなどといふ例は、稀有である。名人上手であれば、生存時代に名望を得るといふのが当然であらう。

底本.. 国立国会図書館デジタルコレクション『世阿弥十六部集評釈 上巻』能勢朝次著
欠ページ補填.. 同書別版